

雪の上高地

山本太郎

長崎で単身赴任を始めて五年が過ぎた。長崎と東京、一〇〇〇キロほど離れた土地に居を構え、二つの土地を行き来している。加えて、国内、海外の出張が入る。スケジュールは時に想像を超えるものとなる。二〇一三年の三月もそんな月の一つだった。海外出張こそなかったものの、長崎、東京の数度の往復に加え、出雲、大阪、淡路、岩手県の海岸沿いの町である大槌、陸前高田、そして高知と仕事での出張が続いた。

上高地へ行きたいと思ったのは、そんなときだった。あと一カ月もすると山開きがあり、上高地は人で溢れる。その前の上高地へ行きたいと思ったのである。

手帳を繰り、とある週末、休日をとった。

上高地には冬、宿泊できる施設はないが、徒歩で二時間ほど先の徳沢には冬季小屋があつて、北アルプスが冬の眠りについ

た後も独り、小屋番がいるという話を聞いたことがあった。電話をすると、何回かの不在の後に電話はつながり、電話の向こうで男が「食事は用意できないが、自炊をするのであれば、寝具はある」と言った。もちろん、それで十分だった。食べる物は、自分で担いでいけばよい。「雪の状況はどうですか」と訊くわたしに、「ワカンまでは必要ないと思いますが、アイゼンはあるほうがいいでしょうね」と教えてくれた。それで、心は決まった。小屋で一泊し、雪の上高地や徳沢から見える前穂高東壁、奥又白の谷、蝶ヶ岳を望んでみようと思った。あわよくば光のない山中で、星空の中に身体全体を浸してみたいと思った。加えて言えば、そんな自然の中で少しばかり独りになりたいと思ったのである。

となつてはわからない。

通った小学校は、生徒数が一年生から六年生の全校生徒を合わせても一〇〇人を少し超えるほどで、入学の時の同級生は七人だった。担任になった女の先生は「みんなは三十四の瞳です」とよく言った。それがみな保育所から一緒に、〇歳あるいは一歳から一緒に過ごした仲間とときに兄弟姉妹のように、町全体が一つの擬似家族のようであつた。居間に続く縁側が海へ延びる小さな道路に面し、引き戸を開けると道から家の中が丸見えになる漁師町の家々は、祭りや盆の夜には大きくその戸を開け放ち、道行く人々——それは地元に移住した人だ、子どもも例外でなく、スイカやジュースが勧められた。「どこの子だ？」という家人の問いに「磯太郎さんところの孫ですよ」と別の家人が答え「そうか、磯やんところの孫か」と祖父の名前が出たりすると、それで身元確認は終わった、そんな関係性が残っている場所だった。小さな世界だった。

毎日一〇分ほどの道を歩いて学校へ通い、放課後は、校庭で一〇人ほどの仲間と遊ぶ。町から外の世界へ子どもたちが出るのは、都会に住む親戚を訪ねるときくらいで、それも年に一、二回のことだった。それが当時のわたしにとって世界の全てだった。

にもかかわらず、時が過ぎわたし自身が大学へ進むために故郷を離れて、以降、その町を訪れたことはあつても、昔の友人

*

ときどき無性に独りになりたいということに大きな理由はない。今の自分の位置を確かめ、進むべき道を考える、独りになることで、そのための羅針盤を準備するなどは、自分に対する言い訳にもならないが、子どもの頃、独り教室の外を見ながら、窓から広がる空や海を背景として、心象風景を空想のまま旅することは好きだった。小学校の教室の窓からは、すぐに海が見えた。晴れた日には遠く四国の山並みを望むことができた。海を渡る風は直接校舎に吹きつけ、窓を揺らした。そうした風には、春のやさしい風もあれば、夏の潮風も、秋の爽やかな風も、そして冬の木枯らしのような風もあつた。校庭がそのまま海につながる海辺の小さな小学校だった。

小学校へ入ったばかりの頃の昼休み、だれが言い出したのかはわからないが、海岸に出て、午後の鐘が鳴るのも知らず、浜辺で貝拾いに夢中になったことがある。集団で行方不明になった一年生に先生たちが慌てて辺りを探し回った。「全員がいなくなったのですからね」と以前、母から聞いたことがある。かすかな記憶はある。心配顔の先生を前に一年生全員が泣いている。そんな光景が記憶に残っている。青い空と海が子どもたちの泣き顔に重なるが、それがその日の本当の記憶なのか、母の話聞いた後年、わたしが想像で作上げた記憶なのかは、今

や町の人たちと会うことはなくなっていった。それから三〇年が過ぎた。否、今から思えば、小学校から中学校、高等学校、そして大学へと進むなかで、新しい世界や新しい友人との出会いに夢中になり、そうした古い知り合いと過ごす時間は随分以前からずっと減っていたのである。もちろん、当時はそんなことを考えることさえなかったのだが。

小学生だった当時、そんな小さな世界で何を空想していたのか。今となつては思い出すことさえできない。ただ少なくとも、その町を出て行くことを空想していたわけではない。そのことだけは確かな気がする。そこは愛するものすべてがいる、わたしにとつてかけがえのない場所だったのだから。裸足で鬼ごっこに興じた春休みや、真っ黒になるまで浜辺で遊んだ夏休み。時間は無限にあるような気がしていた。それは子どもだったわたしにとって永遠に終わらない時間だった、はずだった。外という世界を知るまでは。

*

上高地へ向かったのは、よく晴れた日だった。ザックに荷物を詰め、中央線の特急に乗った。特急を松本で降り、高山線で沢渡まで行った。上高地へは、沢渡から徒歩で入った。逆巻温泉を過ぎ、中の湯のバス停までゆっくりと坂道を登っていく。ときどき、車がわたしを追い越していった。

中の湯のバス停のところで道を右に折れると、そこが釜トンネルの入り口だ。ここから先はすべての車両が冬、通行止めとなる。非常灯のみ点灯したトンネルを独りで歩く。ヘッドライトの明かりがわずかに道を照らす。ふと、そのライトを消してみた。辺りが闇に包まれた。それでも、少しすると目がその闇に慣れてくる。目が慣れてきたところで歩き始める。トンネルの勾配は身体に感じられるほどには急である。一步一步、確かめるように歩を進める。

トンネルから出た。そこで風景は一変した。一面の雪景色が広がっていた。少し行くと焼岳が見えた。大正池からはバス道を変えて、田代湖から帝国ホテルへ至る夏の遊歩道を歩く。膝ほども積もった雪に、ときどき足を奪われる。窓や玄関を板で覆ったホテルは、まだ冬の眠りの中にある。朝の凜とした空気の中に人影もない。

雪を頂いた穂高連峰が見えた。上高地が神降地になり、神河内になるといふ、そんな話が現実のものに思えた。独り占めした上高地と、梓川、そして目の前に広がる銀世界と山塊は、それほどに美しかった。

窓の外を見ながら空想するということをしなくなったのは、一体いつ頃のことだったのだろう。日々の仕事に追われるなかで、空の青さや海の蒼さを忘れ始めたのはいつ頃からのことだったろうと思った。

*

「春樹、もう行っちゃったかな?」と、朝、布団の中でもぞもぞしながら半ば独り言のように息子が呟いたのは、上高地から帰って来て間もない日曜日のことだった。四月で小学校四年生になる。春樹というのは、その日、埼玉へ引越しをする友達のことだった。二年生の時から一緒に少年野球をやっている、以降、学校も一緒、野球も一緒と、一番仲のよい友達となっていた。「まだじゃないか。」「お昼頃」って、春樹の父さんが言っていたから」と言うわたしに、息子は返事もせず、そのまま「トイレ」と言いつて洗面所へ歩いていった。

飼っていたカメを不注意で死なせた日「いっそぼくが死んだ方がましだ」と父の胸で泣いた息子だった。それが随分と大きくなった。

二年近く前のことだった。家の近くの小さな店でカメに魅せられた息子は、家に帰ってから「カメ、飼っちゃダメなんだよね」と、自分を納得させるように、それでも諦められない気持ちで伝えるために、何度も「ダメなんだよね」と母に訊いた。父の許可を得ることを条件に、カメを飼ってもいいと言ったのは、そんな息子がかわいそうになった母だった。そのとき父は「ちゃんと世話はしろよな」とだけ言った。その日から、息子はカメに夢中になった。食べるものは雑食だが、好みがあるの、いろいろと試してみなくてはならないこと。水も必要だが、息をするために、鼻を空気に出すことのできる置石をしなくてはならないこと。皮膚病になりやすいので、三日に一度水を変え、日光浴をさせなくてはならないことなど、など。まだ、ひらがなもうまく読めないのに、近くの図書館で借りてきた本の絵や写真をじっくり眺め、それでもわからないところは母の助けを借りて一つひとつを調べていった。

オバマと中国

米国政府の内部からみた
アジア政策

ジェフリー・A・ペーダー著
春原 剛訳

経済大国化した中国、緊張する朝鮮半島情勢そして日本……オバマ政権のアジア戦略とは何か? その政策の根拠を担った著者が証言する。2625円

歴史学の アクチュアリティ

歴史学研究会編

現代社会に対する歴史学の役割とは何か。2012年末のシンポジウムに基づく論考と、現代の歴史学の重要なテーマを論じた座談会を収録。2940円

庭師 小川治兵衛と その時代

鈴木博之

明治～昭和前期の政治家・企業家たちが愛した数々の近代和風庭園を造り続けた七代目小川治兵衛を通して、近代日本のあり方を見直す。2940円

メディアが震えた

テレビ・ラジオと東日本大震災

丹羽美之・藤田真文編

未曾有の複合災害であった東日本大震災にメディアはいかに対応したか。研究者と報道関係者が、独自の調査と実体験から明らかにする。3570円

シリーズ

図書館情報学

(全3巻) 刊行開始

根本 彰編

A5判・平均280頁 ■内容見本送呈
図書館情報学の理論から実務まで、必要なトピックをすべて網羅し、全体像を概観した新シリーズ。

【第1回配本】

①図書館情報学基礎

根本 彰編/3360円

【続刊】②情報資源の組織化と提供

③情報資源の社会制度と経営

東京大学出版会

〒113-8654 文京区本郷7-3-1 東京本館
TEL 03-3811-8814 FAX 03-3812-6958
http://www.utp.or.jp/ 【価格税込】

レクチャー
第一次世界大戦を考える

捕虜が働くとき

—第一次世界大戦・総力戦の狭間で—
●大津留厚著 敵国のために働くとはいかなる体験だったのか。 ¥1680

戦う女、戦えない女

—第一次世界大戦期のジェンダーとセクシュアリティ—
●林田敏子著 戦えない性である女性は、愛国心をどう示したのか。 ¥1680

親鸞の手紙

—付・恵信尼の手紙—

●石丸晶子編訳 遙か遠国で布教の熱意に燃える最愛の門弟達にしたためた、現存する全四十三通の手紙を易しく説き明かす。 ¥2100

*

東日本大震災の人類学

—津波、原発事故と被災者たちの「その後」—
●T・ギル／B・シテガ／D・スレイター編 現在進行形の災害に直面する被災地のエスノグラフィー。 ¥3045

*

「朦朧」の時代

—大観、春草らと近代日本画の成立—
●佐藤志乃著 近代日本画の革新、伝統とのせめぎあいはいかなるものだったのか。なんのこともかわらないモーローたる表現、「朦朧」をよみとく。 ¥3780

(表示価格は税込です)

人文書院

京都市伏見区竹田西内畑町9
☎075-603-1344 FAX075-603-1814
http://www.jimbunshoin.co.jp/

山は、本当にきれいだった。そこに、二〇年前の「わたし」、やや歳のいった「青年」、そして二〇年後の「息子」の三人の姿が一瞬重なって見えた気がした。

「アイゼン、持ってきましたか？」と青年が訊いた。明け方冷え込んだから雪が凍っているかもしれない。アイゼンを着けたほうがいいのかもしいれないと言った。「ありがとう、持っています」とわたしは答えた。一時間後、わたしは小屋を後にした。アイゼンを着けて、凍った雪を踏みしめながら徳沢を後にした。

生まれて二カ月ばかりの小さなカメが家に来た日「まず、名前を付けなくちゃね」と言う母に「ぼく、もう決めてた。カメ吉だよ。カメだから、カメ吉。わかってないね、母さんは」と息子は得意そうに鼻を鳴らした。それから彼は、晴れている限り、カメの水槽を戸外へ出し、日光浴をさせ、餌を与えた。そして夏休みの自由研究に言うて、毎日の体重を計った。よく晴れた夏の日だった。息子は、友達との遊びに夢中になって、日光浴のために日向に出したカメの水槽を取り込むことを忘れた。息子は「父さん、カメを殺したのは、ぼくだ。死なすくらいだったら飼うんじゃないか」と、声を上げて泣いた。そんな彼にどんな言葉をかけてやることもできなかった。ただ抱きしめてやることしかできなかった。以降、あんなに毎日していたカメの話を息子にしたことはない。

しばらくすると、トイレの中から歌声らしきものが聴こえてきた。音程もリズムもめっちゃくちゃだった。トイレから出てきた息子が言った。「おれ、春樹と同じ中学へ行って野球やるからいいや。いいでしょう、父さん」と。

時代は違いますが、四〇年も昔に「少年」として彼と同じ道を歩いてきた者として、わたしは、今の息子のその思いが叶う可能性が限りなく低いことを知っている。春樹が引越しの挨拶を兼ねて最後に我家へ来た日、「一人で電車に乗れるようになったら、泊まりに来いよな」と言うわたしに、息子は「よっしゃ」と叫び声を上げ、「春樹はすぐ来れるよ。だって、あいつ、頭

がいいから」と言った。春樹はうれしそうに肯いた。それでもやがて、二人には新しい友達ができ、新しい友達と新しい環境の中で、少年は夢中で生きていくことになる。そのことを、わたしは知っている。だからこそ、わたしは、今の息子たちのその思いを大切に抱きしめて欲しいと思った。息子が、そして春樹が大人になったとき、きっと、そうしたことを思い出す日が来るに違いないと思うから。

*

徳沢にある冬季小屋では、その日、客はわたし一人だった。小屋番は少し歳のいった青年だった。それでも電話で想像していたより若い。「あと三週間ほどすると、山を降りるんですよ。上高地の山開きでね」と青年は言った。青年は、秋、山が閉まるのに合わせて山に入り、山が開かれるのに合わせて山を降りるという。その間、五カ月を毎年徳沢で甲斐犬と二人で過ごす。そんな生活を送り始めて今年で一〇年になるという。

翌朝、小屋の前にいたわたしの横に、大にえさをやり終えた青年が来た。「山、きれいですよね」と青年は言った。そのとき、いやになるほど訊かれているに違いないから訊くまいと思っていた言葉が口をついて出た。「寂しくない？」青年はごく自然な感じで「寂しくはないですね。独りでいることは嫌じゃないから」と答えた。